

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：生活環境学科

資格：准教授

氏名：井上 雅人

研究分野	研究内容のキーワード
デザイン史、デザイン論、ファッション史、ファッション論、物質生活史	近代、日本、ファッション、デザイン、物質生活
学位	最終学歴
修士（社会学）、学士（文学）	東京大学大学院 人文社会系研究科 社会文化研究専攻 博士後期課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 生活デザイン・文化に関する情報交換会	2016年4月1日	生活環境学科生活デザインコースのカリキュラム整理
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 生活環境学科担任代表	2017年4月1日	
2. 生活造形学科担任代表	2015年4月1日2017年3月31日	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 専門社会調査士	2010年10月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 生活美学研究所研究員	2019年4月1日	
2. 附属ミュージアム準備室常任委員会 副委員長	2019年4月1日	
3. 附属ミュージアム準備室運営委員	2016年4月1日2018年3月31日	
4. 共通教育委員	2014年4月1日2017年3月31日	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. ファッションの哲学	単	2019年12月30日	ミネルヴァ書房	ファッションとは、衣服のことではない。それは、ひとつの考え方のことだ。あるいは、私たちの時代特有の、ユニークな世界観と言い換えてもいい。ファッションとは、ものの見方、あるいは、世界の捉え方なのだ。それは、「身体」と「流行」の関わりによって、私たち自身や、私たちを取り巻く世界が、日々変化していくという世界観である。そして、精神ではなく身体が、一貫性や論理性ではなく移りゆく流行が、世界の行く末を決めていると受け入れる姿勢でもある。
2. 洋裁文化と日本のファッション	単	2017年06月19日	青弓社	女性たちが自分の洋服を自らの手で作る技術を中心とした洋裁文化。1940年代後半から60年代半ばまでの間に一気に形成され、そして消滅したその実態を、デザイナー、ミシン、洋裁学校、スタイルブック、洋裁店、ファッションショーなどの事例から立体的に描き出す。
3. デザインの瞬間	共	2003年06月	角川書店	責任編集。人はなぜものをつくるのか？ 空間演出の先駆者にスポットを当て、ものづくりのプロセスを紐解く。多分野の空間演出の先駆者の紹介も収載。ものづくりの本質を見極め、本来あるべき正しい道を探る。
4. 洋服と日本人 国民服というモード	単	2001年10月1日	廣済堂出版	日本人に洋服=近代産業社会的な身体をもたらしていたのは、国民服、標準服、もんぺといった軍国主義の産物であった。総動員体制下における着ることの自由と不自由を指し示す。
2 学位論文				
1. 「モード以前の事：国民服と標準	単	2000年03月	東京大学大学院	修士論文。日本人が近代産業社会的な身体を獲得する

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
服のデザイン決定及び普及活動に見られる衣服のメディア性とコミュニケーション状況				葛藤の中で、洋服という具体化された物とどのように格闘してきたかを、メディア論、ファッション論、記号論などの視点から明らかにした。
3 学術論文				
1. ファッションと人間解放の神話 自由な身体に閉じ込められた自我と、その表出	単	2018年10月25日	西山哲郎、谷本奈徳編『身体化するメディア／メディア化する身体』風塵社	ファッションについて考えることは、流行によって衣服が移り変わっていくメカニズムを考えることだが、それを違った言葉で言い表すと、身体と人工物の関係の変遷について考えることである。衣服は、社会が呈示する身体、つまり、社会が考える「人間のあるべき姿」の具体的な形である。ファッションは差別の体系である一方で、喜びでもある。それは、着るという簡単な行為によって、差別を転覆し、自分や人類全体の可能性を切り開く瞬間に立ち会うことができるからだ。
2. スタイル画は何の技術か 長沢節とセツ・モードセミナー	単	2017年04月01日	『Fashion Talks...』vol.1.5 京都服飾文化研究財団	長沢節は、「スタイル画」の名の下に、デザイン画、ファッション・ポートレイト、イラスト、挿絵、美人画、風俗画、グラフィック・デザイン、マンガ、ファッション・イラストレーションなどを統合しようとした。しかし、それらはその後、各分野に再び離散し、解体され、実態を失っていった。長沢の持っていた可能性とは何か。
3. 戦中戦後の女性雑誌における化粧を語る言葉	単	2016年11月15日	『マキエ No.36』ポラ文化研究所	日本において化粧品は、戦後の民主主義とともにやって来たわけではない。戦前から大手の化粧品会社は存在し、戦中を通して、広告を行なって来た。また、化粧品に対する論評や批判も存在し続けた。戦争を挟んで、何が変わり、何が変わらなかったのか。
4. 衣冠束帯 スーツ 工人服 軍服 四つの身体を統合する試みとしての国民服	単	2013年10月	『日本の男服 メンズ・ファッションの源泉』神戸ファッション美術館	国民服は、20世紀の人間がいくつもの身体を持っていたことを教えてくれる。そして社会には、いくつもの身体を統合しようとする脈動が絶えずあることも教えてくれる。国民服は20世紀における例外的な衣服として扱われがらだが、国民服以前の歴史も、国民服以降の歴史も、国民服と同様の、身体の統合と失敗の試行錯誤の歴史としてあることに変わりはない。国民服以降の衣服の革命的な変化も、身体のような区分の統合を試み、成功もしくは失敗したのか、という観点で見直さなければならないだろう。
5. コム・デ・ギャルソン論争とアンアン革命 一畑谷雄高と吉本隆明の論争にみる、ブレタボルテへのまなざしの変化	単	2013年09月	『京都精華大学紀要』43号 京都精華大学	『アンアン』の1984年9月21日号に、「現代思想界をリードする吉本隆明の「ファッション」という文章が、見開きで掲載された。この文章が有名なのは、これが掲載された後に、吉本隆明と畑谷雄高の間に「コム・デ・ギャルソン論争」と呼ばれる一連のやりとりがあったからだ。85年に起きたこの論争は、まさに女性が洋服を作ることから買うことになった30年間の終わりに起きた、象徴的な事件でもあるのだ。
6. 国民服 境界なき空間のユニバーサルな身体	単	2013年04月	『DRESSSTUDY』63号 京都服飾研究財団	国民服、正しくは「大日本国民服」は、軍部によって国民が無理矢理に着せられた簡易版の軍服のように思われている。実際に公衆に出されたときには簡易軍服としての役割を期待され、戦局が進展するにつれ簡易軍服として着用されたのも事実である。しかし、近代における身体を考えるとき、国民服をそれだけの存在と片付けてしまうわけにもいかない。国民服は、東洋の片隅で作られた、あまりにみすばらしい服ではあったが、近代化と伝統社会との葛藤を抱えた社会における非常時の衣服であったからこそ、近代において人間の身体がどう扱われているかを露わにした。
7. 造形は衣服と建築から成っている 今和次郎の服装論	単	2013年01月	『今和次郎と考現学』河出書房新社	今和次郎は、衣服と建築という二つの造形の極の間で、人々が戸惑いつつも行動し創造する様を観察することによって、変化していく社会をつかみ、同時に、より良くしていこうとした。その意味では、考現学から生活学に至るまで、その立ち位置は全く変わっていないと言える。
8. 自由・平等・コム デ ギャルソン ——コム デ ギャルソンと制服の思想	単	2012年12月	『相対性コム デ ギャルソン論』フィルムアート社	コム・デ・ギャルソンは、ヒッピーやフォークロア調を代表とするような70年代の多様に彩られた空気のなかで、紺や黒を基調とした禁欲的な服をつくるブランドとして認知されつつ登場した。「制服のようだ」とも評されたコム・デ・ギャルソンの服は、デザインとしては確かに「平等」の服であるが、しかし他とは違う服を着ていこうという主張を持った「自由」の服であった。「自由」と「平等」のせめぎ合いを考えるに、これほど相応しいブランドもないだろう。
9. 移動する身体	単	2012年10月	『生活の美学を探る』光生館	「服従させられ訓練される」身体と「自由に動かせる」身体を、ひとつの身体のなかに平然と同居させ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
10. 80年代をどう捉えるか	単	2012年02月	『Fashionista』1号	てしまったのが近代である。そして、こういった、従順でありながら自由に動かせる新しい身体に「メディア」を次々と繋ぎ、拡張していったのも近代であった。
11. プロダクトデザインに倫理はあるか	単	2011年11月	『生活をデザインする』光生館	イッセイミヤケ、ヨウジヤマモト、コムデギャルソンのいわゆる「御三家」が80年代の「DCブランドブーム」とともに日本中を席卷しただけではなく、パリ・コレクションを通して世界中に多大な影響を与えていった、という決して間違いとはいえない物語が完成している。80年代の日本人デザイナーたちによる、いわゆる「黒の衝撃」についての言説は、様々な場所で目にする事が出来る。だが、こういった記述は、「コロンブスのアメリカ大陸新発見」式な記述とたいして変わらないとも言える。日本のファッション・デザイナーたちは、パリにとっては衝撃的な新参者であっても、日本の社会においてもそうであったとは限らない。
12. ファッションデザインを歴史的に考える	単	2011年10月	『生活をデザインする』光生館	身の回りに大量生産でない物がほとんど無いということは、それだけ私たちが、人の手によって形を与えられた物の集まりのなかで生きているということである。環境に具体的な形を与える「デザイン」という行為は途方もなく重要な行為であり、それを司るデザイナーが誰で、何を考えデザインしたのかということは、もっと検討されて然るべきことなのだ。
13. 終着としての世界デザイン会議	単	2011年07月	『デザイン史学』9号 デザイン史研究会	私たちは毎日、服を着ている。しかしどうして私たちは、いままさに身につけているこの服を着ているのだろうか。私たちは、自由に着たい服を着ていると言えるのだろうか。私たちは自由意志ではなく、決められたルールに従って服を選んでいただけということにならないだろうか。私たちが制限されたなかから選ぶことによってしか、自分の体を形づくる事が出来ないのは、歴史的な経緯のなかに私たちがいるからである。
14. 洋裁文化の構造——戦後期日本のファッションと、その場・行為者・メディア (2) (査読付)	単	2011年	『京都精華大学紀要』38号 京都精華大学	世界デザイン会議で人々が分野を越境して交流したことが、60年代のデザインに貢献していることは事実であろう。しかし、そうやって世界デザイン会議を、単純にその後の日本のデザインの隆盛の起点のように位置づけて良いのだろうか。たとえばデザイナーが分野を越境して顔を突き合わせたのは、なにも世界デザイン会議がはじめてのことではない。その20年前の総動員体制下においても、デザイナーや建築家が文字通り総動員され、人脈を形成していった。大政翼賛会文化部や報道技術研究会などが、戦後のデザインに対して与えた影響の大きさはすでに指摘されている。むしろ世界デザイナー会議は、それまでデザイナーたちが個人として交流していた文化的場が消失へと向かう折り返し地点といえる。
15. 洋裁文化の構造——戦後期日本のファッションと、その場・行為者・メディア (1) (査読付)	単	2010年	『京都精華大学紀要』37号 京都精華大学	The author thinks about "Dressmaking culture (Yo-sai Bunka)" by using "champ" that Pierre Bourdieu defined. Moreover, the author thinks what relation "agents" had, and clarifies structure of the society.
16. 昭和三〇年代におけるファッションとテレビCM	単	2010年	『テレビ・コマーシャルの考古学』世界思想社	In addition, the author uses the concept of Marshall McLuhan's "Media". In "Dressmaking culture", important media are "Discourse media", "Space media", and "Body media". "Discourse media" is magazines such as "Stylebooks". "Space media" is a fashion show, a dressmaker's shop, and department stores. "Body media" is a sewing machine and the dressmaking schools.
17. 日本における「ファッション誌」	単	2010年	『都市文化研究』12	The author calls the phenomenon that relates to dressmaking from the 1940's to the 60's "Dressmaking culture (Yo-sai Bunka)". Up to now, it has not been described enough, though it is a very unique "subculture".
			『都市文化研究』12	昭和三〇年代のファッションに関するテレビCMは、「洋裁文化」という場における視聴者＝消費者や、他のメディアとの特有な関係を背景にして、固有の語りの型として練り上げられていった。昭和三〇年代においてテレビCMは、広告手法として頂点に位置したわけでもなく、時代を経るに従って表現手法を単純に単線的に高度化させていったわけでもなく、むしろ、他のメディアとの関係性のなかで試行錯誤を繰り返して、社会の変容に合わせて変質していった。
				日本のファッション誌は『装苑』によってはじめら

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
生成の歴史化			号 大阪市立大学	れ『アンアン』によって完成された、と歴史化されつつあるようだ。それによれば『装苑』は洋裁のための雑誌であり、『アンアン』は消費文化のための雑誌であるという。しかし、細かく検討していくと、そこまではっきりと線を引くことはできず、曖昧な領域があることがわかる。本稿では、『装苑』から『アンアン』へと続くファッション誌の流れの横に別の筋道を浮かび上がらせることによって、日本における衣服に関する雑誌とそれを取り巻く文化の重層性を明らかにすることを試みている。
18. 2007年 関西の洋裁店・洋装店に関する調査研究	単	2009年	『関西文化研究叢書11 関西における洋裁文化形成に関する研究』武庫川女子大学	本稿は、武庫川女子大学関西文化研究センターが主体となって実施した「関西の洋裁店・洋装店に関する実態調査」の報告である。「関西の洋裁店に関する実態調査」は、2004(平成 16)年度に、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業「学術フロンティア推進事業」のひとつとして認定された「関西圏の人間文化についての総合的研究-文化形成のモチベーション-」(MKCR プロジェクト)のうち、「d6 関西におけるファッション(衣)文化の形成-裁縫習得及び衣服作りに関する事例発掘を通して-」の研究活動の一環として行なわれた。
19. 「メディア論」の身体論的問題構制—マクルーハンとマンフォードにおける身体・機械・メディアを中心に	単	2007年	『京都精華大学紀要』33号 京都精華大学	マクルーハンは、「メディア」を送信/受信のシステムとして理解しているのではなく、身体を延長する技術として、「機械」と類似するもの、あるいは「機械」をも含みこむメタ・カテゴリーとして理解している。さらには、身体を延長させるメディアを、それが人間の諸感覚を分裂に導くか、統合に導くかという点において、電気テクノロジーをその他のメディアから分類しようと試みたということが分かる。メディアが画像、映像や言葉を発信、受信、あるいは交換するシステムであるとのみする理解は、マクルーハンを理解する枠組みを随分狭めてしまうのだ。
20. 隆盛期の藤川学園と洋裁文化	単	2005年12月	『関西文化研究』4号 武庫川女子大学	関西一円の「洋裁店」を対象とした調査を実施し、洋裁関係者が、関西のファッション文化の形成に対しどのようなかたちで関わって来たのかの一端を明らかにすることを試みた。インターネットタウンページ (http://itp.ne.jp/) の大阪府、京都府、奈良県、兵庫県、和歌山県、滋賀県に掲載された「洋裁店」に調査票を郵送した。対象店舗数287店舗、有効回収数97票であった。
21. 近代化と民族化—明治時代における和服の近代化をめぐるファッション論	単	2004年	『民族芸術』20号 民族芸術学会	和服を消費社会のなかの商品として捉えた時にどのような論点が浮かび上がってくるかを、「演技」「まなざし」「技術」などの視点や、身体との関わり、流行という観点から考察した。
22. 衣服のコミュニケーション	単	2003年	『モードと身体—ファッション文化の歴史と現在』角川書店	衣服におけるメディア性の二つの位相、衣服自体におけるメディア性、マスメディアにおける情報としての衣服について考察した。
23. ベネトンの広告写真家	単	2003年	『現代写真のリアリティ』角川書店	広告/芸術/報道の垣根はどこにあるのか。ベネトンというアパレル企業の広告戦略を担当したオリヴィエロ・トスカーニの例を見ながら、マスメディア/企業/個人におけるメッセージについて考察した。
24. 総動員体制下の衣服政策と風俗	単	2003年	『衣と風俗の一〇〇年』ドメス出版	国民服、標準服などを文化政策として捉え直し、それが編み出されるまでの文化的葛藤や矛盾を、デザイナーである斎藤佳三の著作を中心に分析することによって検討した。
25. ファッションの歴史記述の諸相	単	2002年	『デザイン学研究』9巻4号 デザイン学会	「ファッション」という言葉をめぐって様々な記述がなされてきたが、言葉に対する定義の不確定性から歴史認識も定まらず、言説は混乱している。ファッションをどのように記述していけば良いかを提言した。

その他

1. 学会ゲストスピーカー

1. 日本人と衣服の歴史	単	2016年08月29日	応用哲学会サマースクール2016 「ファッション批評の最前線：fashion meets philosophy」1/8bldg. 4F イベントスペース Ipe	応用哲学会主催レクチャー 8月29日(月) - 8月30日(火) 13:00-18:00
2. 服飾文化研究における資料の問題	共	2006年03月	武庫川女子大学 日本家政学会服飾史・服飾美学研究部会	登壇者：井上章一、井上雅人
3. 「衣と風俗の一〇〇年」	共	2004年10月	日本生活学会 公開シンポジウム「衣と風俗	『衣と風俗の100年』(ドメス出版) 刊行記念シンポジウム

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1. 学会ゲストスピーカー				
4. 「戦後50年間の服飾文化および服飾デザインに関する概説書 ―服飾文化学および服飾デザイン教育の見直しのために―」	共	2003年11月16日	のー〇〇年 武庫川女子大学中央キャンパス 第45回意匠学会大会シンポジウム	司会：横川 公子（武庫川女子大学） パネラー：青木 美保子（京都市芸繊維大学大学院）、井上 雅人（京都造形芸術大学）、森 理恵（京都府立大学）、平光 睦子（大阪大学）
2. 学会発表				
1. 『考現学の教科書』を考える	共	2011年05月15日	日本生活学会 第38回研究発表大会 早稲田大学	佐藤健二（東京大）・中谷礼仁（早大）・祐成保志（信州大）・石川初（ランドスケープデザイン）・井上雅人（武庫川女子大）
2. 「ジャパニーズ・ファッション」のはじまり	単	2011年03月27日	大正イマジュリィ学会 第9回全国大会	日本のファッション誌のルーツと言われる『服装文化』や『装苑』だけが時代に先駆けたファッション雑誌であったのではなく、それらもまた同時代の様々な動きのなかのひとつにすぎない。日本のファッション雑誌は主に、1・『服装文化』や『装苑』、2・戦後占領期のスタイルブック、3・『アンアン』あたりに起源が求められてしまうことが多い。しかし、ファッション雑誌あるいはファッション文化の起源は、まったく重層的で多様なのだ。
3. 今和次郎の服装研究 着るを視るまなざし	単	2010年05月08日	日本生活学会 第37回研究発表大会	シンポジウム「異装の考現学」
3. 総説				
1. 総動員体制下の「新しい生活様式」	単	2020年09月01日	「表現者クライテリオン」通巻92号 2020年9月号 啓文社書房	「生活様式」と呼びうるものは、単なる生活の送り方ではなく、道徳観と美意識が備わって、はじめて成立する。道徳観や美意識は、生活者自身が、生活していく中で見つけていくもので、それらを生活の中で実践しながら、日々の行為を「生活様式」にまで高めていくものだ。そして、その際に蓄積された行動規範は、「作法」と呼ばれるものになる。防疫は「戦争」ではない。にもかかわらず、戦争を語るようにしか語ることができないのは、国家が国民を総動員して何かを為すことの第一が、あいも変わらず戦争だからであろう。
2. 国民服をどう読むか	単	2020年02月25日	『国民服・衣服研究』復刻版 第8巻 ゆまに書房	『国民服』『衣服研究』は、衣服に関する雑誌で、プロパガンダ雑誌であった。しかし同時に、戦前から戦後へと、途絶えそうになりつつ、様々な文化が陰しく流れていく川瀬でもあったことは特筆してもいいだろう。
3. 服を読む	単	2020年02月07日	『新潮』第117巻第3号 新潮社	エッセイ。 「服だって、自分に似合うか似合わないかを忘れて、良い素材でできているか、丁寧に作られているか、作り手が面白いことに挑戦しているかで見えないことはない。せつかくだから、自分が着られる服を買う方が面白くはあるが、服を手にとって、身体とは無関係の物体として、熟読して、味わって、感心してはいけないということはない。」
4. アパレル業界が「常時セール」という劇薬から脱却するために「ファッション」を再興させる方法	単	2020年01月14日	現代ビジネスオンライン	アパレル産業自身が厳しい環境を生み出してしまった経緯を、「セールとアウトレット」というキーワードのもと簡単に振り返り、そのうえで、今後アパレル企業に何ができるのかを「ファッション」という言葉の意味を考え直すことで模索した。
5. 【書評】リクルートスーツとはそもそも何なのか その普及の背景と長い歴史をひとつひとつ解きほぐす	単	2020年01月01日	図書新聞 第3429号 武久出版	田中里尚『リクルートスーツの社会史』（青土社）の書評。
6. interview 井上雅人	単	2019年6月20日	『vanitas』No. 006 アダププレス	「表象文化としてのファッション、あるいは衣類設計としてのファッションデザインにおける教育や研究は現在、日本において何を前提にどのように実践されているのか。……近年「デザイン」の複雑化が盛んに議論されるにつれ、ファッション産業の周縁から新たな批評空間や研究的実践、実験的教育の萌芽が散見されるようになりました。今号の特集は、この萌芽を多様な側面から明らかにしていくことを目的に、新井茂晃氏、井上雅人氏、Cecilia Raspanti氏、Dehila Hannah氏へのインタビュー、そして現在ファッション産業に携わる方々との匿名座談会を行いました。」（introductionより）
7. コトバトフクの言葉と服	単	2019年6月1日	『ユリイカ 6月臨時増刊号 総特集*書店の未来』第51巻10号 青土社	京都のセレクトショップ「コトバトフク」が、どのように書籍を扱っているか。コトバトフクは、売る／買うという非対称な関係性を持つアソシエーションではなく、作る／着る／知る／話す／読む／書くというさまざまな行為に対して、どの程度、どのように関与するか、人によって違うアソシエーションを作ろうとしている。共に読み書きし、作り着る共同体と言ってもいい。
8. アイデンティティ・フード	単	2018年08月01日	『vesta』No. 111 味の素食の文化センター	現代の社会に生きる者は誰であれ、自分らしくいることと、物とつきあうことの両方を、うまくやっ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3. 総説				
9. 布の消滅	単	2017年04月07日	『最新 現代デザイン事典』平凡社	いかなくなくてはならない。その二つが交差するのが、「ファッション」だが、最近では、アイデンティティを作り出したり確認するために、服だけでなく、食も大きな役割を担っている。アイデンティティと食の関係は、どのような形が望ましいのか、議論すべき時期に差し掛かっている。
10. ファッションの調査でも、まず、人の話をよく聴く	単	2017年03月25日	『日本生活学会 フィールドワークシリーズ 003：さまざまな方法』日本生活学会	2010年『デザイン事典』の改訂版
11. 日本の洋裁文化と民主主義	単	2016年08月01日	「αシノドス vol. 201」株式会社シノドス	物をよく見ることと、人の話をよく聞くことは、調査どうこう以前に、世界との関わりの第一歩として、どのような場合にも大事なことである。
12. 服の声を聴く	単	2016年05月01日	『文鯨』2016春号 『文鯨』編集部	日本人にとって洋服は、戦後の服である。そして洋服には、戦後社会の価値観が染みついている。戦後社会の価値観とは、「民主主義」のことと語っている。もちろん、それはカギカッコ付きの「民主主義」であり、それがどのような「民主主義」なのか、そう簡単に説明できるものではない。だからこそ、「民主主義」の価値観が染みついた洋服について考えることは、とても重要になる。
13. 『ミシンと衣服の経済史』書評	単	2015年09月01日	日本歴史学会『日本歴史』9月号 吉川弘文館	物と人との関係の歴史のことを「物質生活史」という。どのような素材・道具・技術で作られ、どのような使われ方をし、その服の背後にある社会の価値観はいかなるものかについて、言葉を尽くそうとしても、我々は服からほんの少しの情報しか得ることができない。
14. あした着る機能	単	2015年03月01日	『CEL』109号 大阪ガス	岩本真一『ミシンと衣服の経済史 地球規模経済と家内生産』の書評。
15. 手づくりから既製服へ	単	2014年12月25日	『民俗学事典』丸善	我々は、自分の身体を拡張しているのではなく、コンピュータ制御の端末を身体に組み込むことによって、自分の身体を他人の身体機能を拡張する「服」として提供しているだけかもしれない。
16. 「第三期デザイナー」までの理論とデザイン	単	2014年09月10日	『視る』471号 京都国立近代美術館	『民俗学事典』（丸善）の見開き一項目。
17. 人生を彩る技術	単	2014年03月	『婦人之友』婦人之友社	1970年代、世界規模で広がりゆく大衆のためのメディア・ネットワークのなかで、日本人の作る衣服が、情報として取引されはじめた。プレタポルテという新しい衣服の形を中心として、国際的な引用と発信と消費のネットワークが形成され、そのなかに日本の社会も巻き込まれていったのだ。
18. 中原淳一と少女たちのメディア 少女雑誌からファッション誌へ	単	2013年11月	『ユリイカ』45巻16号 青土社	洋裁学校は、決して、着る服を持たない人たちが、服の作り方を学びに行くところではなかった。洋服を着ることは、西洋式の生活を送るということであり、家具から食器から、全てを洋風に改め、正しく使いこなすということでもあった。洋服を作ることは、色の組み合わせを知り、布の特性に親しみ、数字を操作して図面を引くという、感性と知性による活動であった。
19. 座談会) ミシンが語る母たちの近代史	共	2013年10月	『婦人之友』婦人之友社	竹久夢二にはじまり、中原淳一を経て、長沢節へとつながる道筋は、スタイル画や叙情画の系譜でもあったが、雑誌や物によるメディア環境と読者集団の系譜でもあった。
20. 西宮船坂ビエンナーレ2012「竹林」について	共	2013年09月	『生活環境学研究』1号 武庫川女子大学	アンドルー・ゴードン、井上雅人、田部小枝子
21. 神戸ファッション美術館	単	2013年03月	『ポピュラー文化ミュージアム』ミネルヴァ書房	森本真と共著
22. 植田正治写真美術館	単	2013年03月	『ポピュラー文化ミュージアム』ミネルヴァ書房	神戸ファッション美術館の最大の特徴は、「ファッション」の「美術館」という点にある。すなわち、「衣服」ではなくて「ファッション」であり、「博物館」ではなくて「美術館」であるということだ。別の言葉で言うならば、「ファッション」という定義不可能で多義的な対象を「美術」として展示するという挑戦を、名前に込めているということだろう。
23. 手芸と自家裁縫 趣味と生産のあ	単	2011年11月	『生活文化玉手箱シリ	植田正治は、生涯を境港で過ごした。写真館の主人としてスタジオで隣近所の人々を撮り、芸術家として近くの砂浜で作品を撮った。美術館には植田の作品が一万二千点収められているが、何よりも美術館そのものが植田の記憶になっている。外から美術館を眺めた時には、植田の眼となって、写真に撮られる瞬間の少女たちを見ることが出来る。美術館に入った時には、植田のカメラとなって風景を切り取ることが出来る。
				今や「手芸」になってしまった自家裁縫の技術は、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3. 総説				
いだ			ーズ2共感の ちから無 名のちから 明治・大正 ・昭和を生きた人々の 手芸品』武庫川女子大 学資料館	常に「産業的には無価値もしくは低価値なもの」で あったわけではない。むしろ、自家裁縫の技術が「 産業的には無価値もしくは低価値なもの」とされて いく過程で、「手芸」として位置づけられ、消滅せ ずに復活していったと捉えることすらできる。
24. 日本の文字とグラフィックデザイ ン	単	2010年10月	『生活文化玉手箱シリ ーズ1キモノ の文字文 様に託された世界』武 庫川女子大学資料館	紙以外の場所での文字のグラフィック・デザインは 、明治以降、紙の上と同じように展開したわけでは なかった。例えば、着物のような、紙媒体ではない もののグラフィック・デザインには、紙媒体では見 られないような思惑のせめぎ合いを見ることが出来 る。
25. 1940/50年代と消費者の身体 洋 裁文化の事例を中心に	単	2009年7月	『ポピュラーカルチャ ー研究 Vol.2 No.4』 京都精華大学	
26. ロンドン万国博覧会	単	2009年4月	『デザインの現場』美 術出版社	19世紀は博物学と博覧会の時代である。1851年にロ ンドンのハイドパークで行われた「すべての国の産 業の成果の大博覧会」、通称「ロンドン万博」はその 申し子だろう。600万人を集めた前代未聞のこの大 イベントは、しかし、デザイン史の文脈上に置いた とき、どうにも解釈が定まらない。
27. 「洋裁映画」にみる「デザイナー 」の表象	単	2008年3月	『東アジアにおける洋 装化と洋裁文化の形成 』武庫川女子大学	かつて戦後の社会において、洋裁を舞台とした文学 と、それを原作とした映画が数多く作られた。とい うのも、当時の社会には、洋裁家、洋裁師、ドレス メーカーなどと呼ばれた「デザイナー」がどのよう な存在で、どのような生活をしていたかについて、 分かりやすく使いやすい共通のイメージがあったか らである。それは、社会のなかで一人生きていく女 性というイメージである。
28. 洋裁文化からみたテレビCM	単	2008年	『テレビCM研究 Vol.2 No.1 』京都精華大学	京都精華大学「テレビCM研究会」における発表の収 録。
29. インダストリアルデザインからみ たテレビCM	単	2008年	『テレビCM研究 Vol.2 No.3』京都精華大学	京都精華大学「テレビCM研究会」における発表の収 録。
30. カタログ概史 コメニウスからイ ンターネットまで	単	2007年	『ポピュラーカルチャ ー研究 1巻2号』京都 精華大学	京都精華大学「ポピュラーカルチャー研究会」にお ける発表の収録。
31. ファッションデザイン	単	2006年	『近代デザイン史』武 蔵野美術大学	現在我々が着ているものは何かという問題意識から 出発し、西洋服飾史や、日本風俗史でも、洋装化史 でもない衣服の「デザイン」の歴史を記述した。
32. ファッション文化	単	2004年03月	『社会情報学ハンドブ ック』東京大学出版会	ファッションにおけるメディアの二つの位相、メデ ィアのなかの衣服と、メディアとしての衣服につい て検討した。
33. コンシューマ=デザイナーの発現 消費活動化するデザイン	単	2004年	『デザインニュース (266)』日本産業デザ イン振興会	最終的にコラボージュを行うのは消費者で、かつては ライフスタイルの提案まで行っていたデザイナーの 仕事は、その前線を遙かに後退させ、今では徐々に 消費者の仕事に置き換えられている。
34. ピアシング/タトゥー	単	2000年6月	『20-21世紀デザ インインデックス』IN AX出版	男性ならばヒゲをそり、女性ならば眉毛を抜く。199 0年代後半には美容師が注目されたが、髪を切る行為 も身体加工の一つには違いなく、我々は身体を加工 して自らの身体を所有することを日々の実践の中に 組み込んでいる。髪の毛などの体毛を加工することは 比較的何の抵抗もなく受け入れられている身体加工 ではあるが、身体を加工することにたいしては倫 理的な抵抗感が根強く残っているのも確かである。
35. スポーツウェア	単	2000年6月	『20-21世紀デザ インインデックス』IN AX出版	『1980年代まで、スポーツという市場はナショナリ ズムが直接的に資本主義とからみ合った現場として 捉えることが出来た。オリンピックやプロスポーツ に見られるのはナショナリズムと結びついたエリ ート主義であり、そういった意味ではスポーツのため の衣服は着られる身体と対になった身体の優秀さを 証明する手段で、その様は軍服と同様にナショナル ヒーローの証明であった。しかし、1980年代になる とスポーツのグローバル化とも呼べる現象 が起り、単純にナショナリズムとのつながりで語 ることは出来なくなってきた。
36. Tシャツ/ジーンズ	単	2000年6月	『20-21世紀デザ インインデックス』IN AX出版	ジーンズは機械論的身体をスーツと同じくらいの完 成度で抽象化させたものである。Tシャツとジーンズ というスタイルがスーツに変わるものとして男女共 通の身体の抽象として定着していくと断言は出来な いが、男性にとっても、かつて普段着であったジャ ケットとスラックスというスタイルに置き換わりつ つあるということは事実であろう。ジーンズは今や フォーマルとされる領域に着々と進出し、それと同 時にジーンズ特有の意味を喪失しようとしている。
37. プレタポルテ	単	2000年6月	『20-21世紀デザ インインデックス』IN AX出版	プレタポルテとよばれる高級既製服は1950年代にそ の胎動が始まる。プレタポルテ生産に最初に積極的 に取り組んだのはピエール・カルダンといわれてお

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3. 総説				
38. A-poc	単	2000年6月	『20-21世紀デザインインデックス』IN AX出版	り、オートクチュールと呼ばれる高級仕立服が上流階級の象徴であった時代において、彼はそのためにバリのオートクチュール協会から除名されている。まもなくカルダンは除名を解かれて協会に復帰することになるが、それはカルダンが許されたということの意味したのではなかった。その頃には多くのクチュリエがプレタポルテ販売をはじめていた上に、いわゆるライセンス生産によってオートクチュール以外の分野にも進出をはじめており、協会が時代の流れに逆行できなくなっていたのである。
39. 再生衣料	単	2000年6月	『20-21世紀デザインインデックス』IN AX出版	1999年のコレクションで三宅一生が発表したA-POC (A piece of cloth)は三宅一生のデザイン活動の集大成として位置付けることが出来る。A-POCはチューブ状の編地の布として売られている。三宅は消費者がデザインを選択出来ることを強調しており、実際に消費者は丈や袖の長さを好みで裁断し、衣服や靴、靴下などを作ることができる。もちろん全く自由というわけには行かないが、従来のブランドが売り物としていたデザイン性、カッティング、縫製といったものを全て消費者に一任してしまおうという姿勢は、衝撃を持って受け止められた。
40. 純粋デザインとしての存在が示すもの	単	2000年11月	『スタジオ・ボイス』299インファス	90年代になって新たに持ち上がった「エコロジー」思想は衣服産業をも巻き込むことになり、かつて70年代に提唱された「エコロジー」ファッションとは全く違った展開を見せている。衣服自体をリサイクルとして社会に循環させる方法から、一度消費されたものを原料として新たな衣服を再生するという方法へのシフトがそれだ。
41. デザイナーが造形する滑らかな身体、所有への渴望	単	2000年11月	『スタジオ・ボイス』299インファス	ウェブ上で展開されるヴァーチャルプロダクトについて、具体例を紹介しつつ、その限界と可能性を考察した。
42. ファッション界を読み解くキーパーソン	単	2000年10月	『スタジオ・ボイス』298インファス	プラスチックによる有機的な曲線が人体と融合する時、それはむしろ活動を疎外する無機物として立ちあらわれる。プラスチックと人体を接合しようと試みたデザイナーやアーティストを紹介しつつ、われわれの身体の未来について考察した。
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
1. 竹林	共	2012年10月	西宮船坂ビエンナーレ2012	「井上雅人研究室 + 森本真研究室」名義
2. stilllife 2.2	共	2011年8月	大阪市立図書館	「井上雅人 + CENTER EAST」名義
3. stilllife 3	共	2010年10月	「井上雅人 + CENTER EAST」展 京都造形芸術大学ギャラリーRAKU	「井上雅人 + CENTER EAST」名義
4. stilllife 2	共	2010年10月	「井上雅人 + CENTER EAST」展 京都造形芸術大学ギャラリーRAKU	「井上雅人 + CENTER EAST」名義
5. stilllife 1	共	2010年05月	「京展」 京都市立美術館	「井上雅人 + CENTER EAST」名義。「京展」入選。
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 国民服・衣服研究 第2回配本 全4巻 衣服研究 1942 (昭和17) 年10月～1944 (昭和19) 年11月	単	2020年02月25日	ゆまに書房	この雑誌は、昭和十六年十月の第一号からはじまり、『衣服研究』とタイトルを変え昭和十九年まで続けられた。その中で一番のイベントは、「婦人標準服」の公募と審査だろう。当時の「総動員体制」という名が示す通り、幅広い領域の人々が動員され、衣服に関わる文化政策に協力していく様がよくわかる。また、創刊時の副題に「生活文化総合雑誌」とあるように、戦時下の生活や文化全般の話題も多く提供している。小説家から建築家まで、あらゆる生活と文化に関わる人々を巻き込んでおり、彼らが、戦中に何を書いたか確認できる貴重な資料にもなっている。雑誌『国民服』は、戦前の生活・家政学・ファッションが、いかに変質し、あるいは引き続き、戦後の生活や文化へとつながっていったかを証言してくれる貴重な資料である。
2. 国民服・衣服研究 第1回配本 全4巻 国民服 1941 (昭和16) 年10月～1942 (昭和17) 年9月	単	2019年10月	ゆまに書房	財団法人大日本国民服協会の機関誌として創刊、戦時下の生活全般の多岐にわたる話題を提供し続けた雑誌の復刻。大日本国民服は第二次世界大戦末期に日本国民の男性のほとんどが着用した衣服で、簡便に軍服へ転用できる衣料の民間貯蔵を目的として1940年春に制定

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
3. 上スハの1918年	単	2019年09月02日	共同研究「近代東アジアの風俗史」（井上章一教授、斎藤光共同研究員）国際日本文化研究センター	され、昭和15年11月1日勅令725号「国民服令」により着用が法制化した。その後、女性には婦人標準服が推奨された。しかし、それらの衣服は国民の生活に直ちに浸透したわけではなく、初期段階には普及のために様々な方策が取られた。その一環として創刊された本誌は、いわば衣服の話題を中心としたプロパガンダ雑誌といえる。
4. 二十世紀前半～中期、日本の洋裁文化における 服を作ること、服を買うこと、着装のルールに従うこと、など「着る」ための社会的な行為について。	単	2019年08月31日	「ドレス・コード? — それぞれのファッション学の視点から」 登壇者： 内村理奈（日本女子大学家政学部 准教授） 平芳裕子（神戸大学大学院人間発達環境学研究所 准教授） 井上雅人（武庫川女子大学生生活環境学部 准教授） 小形道正（京都服飾文化研究財団 アシスタント・キュレーター） 会場：京都国立近代美術館 1階講堂	上諏訪は温泉地として有名な街道筋の歴史的な街で、製糸業の勃興、中央線の開通、諏訪神社の官幣大社昇格とともに郊外地や観光地として変化していった。大正7年は、産業都市として諏訪湖畔が一番栄えた時期である。 職人と農家の集落であった小和田は、脇を線路が通るようになり近代化の波をかぶるが、共同浴場を中心としたコミュニティを存続させ、近代以前の習慣や地理的環境を残し現在に至っている。 小和田の青年は、伝統的な大工仕事を続け、神社へしばしば参拝し、湯や舟を通じた地縁的共同体の維持活動をしながらも、近代国民国家の一員として、製糸産業と関わりを持ち、教育を受け続けながら、徴兵検査もうけつつ、映画・劇・スケート・登山・旅・写真撮影など新しい娯楽を享受し、スペイン風邪にかかったり、高島病院で治療を受けている。小和田の青年の一年分の日記を見ると、これまで語られたのとは違った、近代地方都市の生活が見える。
5. 「パノラマとしての百貨店」展企画展関連セミナー「ファッションと百貨店」	単	2019年07月06日	高島屋資料館TOKYO	二十世紀前半から中ごろにかけての、日本の衣服との関わりは、①流行和服の時代、②自家裁縫洋服の時代、③ブレタボルテの時代、に分けることができる。 正しい洋服を作り、正しく着ることが求められた時代においては、衣服のデザインに独自性は求められなかった。オリジナリティを追求するだけがファッション・デザインではなく、エンジニアリングに近いような技術が求められたこともあった。こういった作品に対しては、今とは違う鑑賞の態度が必要とされるので、パクリを指摘しても意味がない。それぞれの時代に、それぞれの時代特有の衣服との関わり方や、衣服の見方がある。美術館で展示された衣服を鑑賞するためには、見る側にどのような資質が必要か、考えてみるのも面白い。
6. IGSセミナー（東アジアにおけるジェンダーと政治②）「近代日本のファッション文化を再考する：女性・近代化・対抗文化」	単	2018年6月26日	お茶の水女子大学ジェンダー研究所	呉服店からはじまった百貨店と、ファッションとの関係はとても深く、戦前において百貨店はすでに、上流階級向けの流行の発信地になっていました。ところが戦後になると大衆による洋裁文化が勃興し、百貨店は転換を強いられます。そこで百貨店は、パリのクチュリエたちのライセンス販売を行い、流行の発信地であり続けようとしてきました。しかし、それらは必ずしも利益を生まず、その後ブランド依存の体質も残りました。百貨店が「デパート」と呼ばれた60年代を中心に、語っていただきます。
7. 戦後日本のファッション	単	2018年02月19日	京都服飾文化研究財団	男性、工業化、政治、有名性を中心に語られて来た歴史において、生活の中で、女性たちがいかんにして対抗文化をひっそりと育んだか、洋裁を通した女性の主体的な文化形成、工業化や生活技術の外部化以外の近代化の道、戦争を挟んで変化したこと変化しなかったことなど、現在の歴史学やジェンダー論への反省的な見直しから浮かび上がってくる近代日本のファッション文化を再考する。
8. ファッションって？ 一服について、学ぼうー	共	2017年11月03日	ロームシアター京都 パークプラザ	日本のファッション史における継続と断絶、神話化と神話作用についての解説。 「鹿鳴館以降、洋装化（衣服の近代化）が始まった。」「白木屋の火災で洋装が広まった。」「第二次世界大戦によって、洋装化が中断した。」「『アンアン』によって、衣服は作るものから買うものに変わった。」「1980年代における日本の『ファッション革命』は、劇的に世界のファッションを変えてしまった。」(Valerie Steele)」といった神話を、一つ一つ解きほぐしていく必要がある。 「これからの時代、どのように『ファッション』と付き合っていけば良いのでしょうか——。 ゲストに井上雅人さん、蘆田裕史さん、藤井美代子さんをお招きし、これからのファッションについてお話ししていただきます。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
9. 嗜好品とモダンデザイン	単	2017年07月08日	嗜好品文化研究会	異なる特色を持つブランドをご紹介します、その特徴や差異から今の時代の「ファッション」を読み解きます。また若手ブランドのアイテムを扱うセレクトショップをやっていくことの意味、ファッション業界に携わることには希望はあるのかなどなど。様々な視点からお話いただきます。」 (京都岡崎葛屋書店webサイトより)
10. 図鑑デザイン全史	共	2017年07月06日	東京書籍	ウィリアム・モリスからはじまり、パウハウスで完成するとされる「モダンデザイン(思想)」と、それへの反発である「反近代」としての「ポストモダン」という視点で、近代のものづくりを考えて行くことには無理が出てきている。「嗜好品」という切り口からだと、新しいデザイン史が見えてくる。 Design: The Definitive Visual History(DK)の翻訳
11. 戦後70年の軌跡 戦後日本のファッションと民主主義	単	2015年08月30日	朝日カルチャーセンター 新宿教室	日本では洋装化が、大衆化のプロセスの中で起こった。もちろん、戦前には上流階級における洋服の文化があり、和服においては百貨店やメディアがからんだ高度な消費社会的なかけひきはあった。しかし、総動員体制における徹底した身体の平等化と、戦後に占領軍が持ち込んだ「民主化」という概念の、具体的な解釈の形として、現在の日本のファッションはスタートしている。「大衆」や「中流」という、のっぺりと漠然とした層にむけてファッションが作られてきたということは、この社会の性格を見事に反映している。「ファッション」と「民主主義」から、戦後日本の社会を読み解く。
12. 「ファッションを考える：ショップ」	共	2015年05月24日	gallery110	「ファッションと場」について考えることを目的とした連続トークイベントの第1回。 登壇者：成実弘至・井上雅人・蘆田裕史
13. 剣持勇の世界	単	2015年05月16日	同志社大学今出川キャンパス至誠館5階共同研究室	第6回デザイン史研究会
14. 長沢節 洋裁文化のアイコン	単	2014年10月11日	Think of Fashion 021	長沢節は、戦後の日本を代表するスタイル画家であり、華やいた少女たちを描いた中原淳一と対照的に、色気のある大人の女性と、線の細い男性を描いた。スタイル画は、現在ではデザイン画と混同されてしまうが、写真印刷が不鮮明な時代にあつて、写真以上にコレクションの昂奮を伝えることのできる、時代特有のメディアであった。長沢は、「長沢はひとりでもいい」と言われるくらい模倣され賞賛された時代の寵児であった。しかし、あまり注目されることは無いが、長沢はスタイル画家以上に、当時のファッション界におけるプロデューサーとして活躍した。セツ・モードセミナーを創立して多くの学生を教えただけでなく、日本発のモードや既製服開発の中心となり、『an・an』などファッション雑誌の創刊に深く関わった。はたして長沢を節点として、いかなるものたちが交叉したのか。戦後日本のファッションを考える。
15. 「Future Beauty」展を語る	共	2014年05月04日	gallery110	京都国立近代美術館で開催の「Future Beauty」展についてのトークイベント。 展覧会の主催者である京都服飾文化研究財団にも所属する石関を中心に、座談会形式で展示について経緯や裏側を含めて語りあった。 登壇者：石関亮・成実弘至・井上雅人・小北光浩・蘆田裕史
16. 「日本のイタリアファッションについて考える」	共	2014年03月02日	gallery110	「古田賢とイタリアファッション展 ヴェルサーチコレクションを中心に」 2014年2月28日～3月9日、gallery 110におけるヴェルサーチ研究者の古田賢によるイタリアファッションコレクションの展示におけるトークイベント。
17. 1960年代のデザイン	単	2013年10月12日	シンポジウム「1960s—メンズ・ファッションの黎明期」 神戸ファッション美術館	日本の洋装化140周年を記念して2012年からはじまったClothing Japan という研究プロジェクトの一環として、また特別展示『日本の男服—メンズ・ファッションの源泉』の関連企画として開催。 石津祥介 (ファッション・ディレクター)、くろすとしゆき (服飾評論家、元VAN企画本部長)、白井俊夫 (信濃屋 取締役仕入担当)、畑塾佐武郎 (元エドワーズ・デザイナー)、百々徹 (神戸ファッション美術館)、成実弘至 (京都造形芸術大学准教授)、石関亮 (京都服飾文化研究財団学芸員)、井上雅人 (武庫川女子大学専任講師)、難波功士 (関西学院大学教授)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
18. デザイン史研究の現況	単	2013年08月23日	帝国ホテルタワー（インペリアルタワー）9階・武庫川女子大学東京センター	第4回デザイン史研究会
19. コムデギャルソン論争とアンアン革命 DCブランドブームを考える	単	2013年05月26日	Think of Fashion 008	『アンアン』の1984年9月21日号に、「現代思想界をリードする吉本隆明の「ファッション」という文章が見開きで掲載された。そして、これが掲載された後に、吉本隆明と埴谷雄高の間に「コム・デ・ギャルソン論争」と呼ばれる一連のやりとりがあった。この論争にたいする評価は、非常に低い。「コム・デ・ギャルソン論争」と言いながら、「コム・デ・ギャルソン」に関する議論は、やり取りの最後にならないと出て来ない。しかし85年に起きたこの論争は女性が洋服を作ることから買うことになった時期の、象徴的な事件でもあるのだ。「コム・デ・ギャルソン論争」や「アンアン革命」という言葉を通して、「DCブランドブーム」をもたらした社会について考える。
20. ファッションの外野が自由に語るコムデギャルソン論——研究者編	共	2013年02月06日	心斎橋スタンダードブックストア（大阪）	西谷真理子・蘆田裕史・井上雅人・千葉雅也
21. カペルとは誰か—神戸仕立業はじめ	単	2012年11月2日	「日本の洋装化140周年記念シンポジウム CLOTHING JAPAN 140 日本の洋服の原点」神戸ファッション美術館	「神戸で初めての洋服店は、神戸開港の翌年、明治2年（1869）イギリス人のカペルが旧居留地（現神戸市役所東遊園地附近）16番館に開業した洋服店」とされている。カペルとは、Philip Samuel Cabelduのことであるが、実像とは大きくずれている。「カペル」が象徴しているものは何か。
22. Kawaii Zakkaの可能性	共	2012年07月4日	「Kawaii Zakka 展覧会～カワイイとカワイクナイの間～」シンポジウム 中之島デザインミュージアム de sign de	スピーカー 岡田栄造（京都工芸繊維大学准教授）・井上雅人（武庫川女子大学講師）たかぎみ江（ぼむ企画）・多田智美（MUESM・編集者）
23. ファッションの批評について考える	共	2012年03月03日	スタンダードブックストア 心斎橋	ファッション批評誌『fashionista』創刊を記念したトークイベント 登壇者：井上雅人・蘆田裕史・水野大二郎
24. ファッションとアートの現在	共	2010年11月21日	『スティルライフ / CENTER EAST+井上雅人』展シンポジウム 京都造形芸術大学 ギャラリーRAKU	井上雅人/成美弘至/百々 徹/蘆田裕史/石関 亮
25. 「スティルライフ 井上雅人 + CENTER EAST」展	+	2010年10月	京都造形芸術大学ギャラリーRAKU	CENTER EAST との共作「stilllife」シリーズの展示。
26. アートは地域を救えるか	共	2010年09月06日	西宮ビエンナーレ2010シンポジウム 場所：旧船坂小学校校体育館（西宮市山口町船坂2103-2）	○パネラー：藤本由紀夫（「ヴェネツィア・ビエンナーレ」）、中瀬康志（FUJINO国際アートシンポジウム・神奈川）、端聡（CAI現代芸術研究所・札幌）、山重徹夫（中之条ビエンナーレ・群馬）、小野寺優元（国際野外の表現展比企・埼玉）、江上弘（我孫子国際野外美術展・千葉）、中田洋子（琵琶湖ビエンナーレ・滋賀）、松尾寛（銀聲舎・和歌山）、高見沢清隆（六甲ミーツアート・神戸）、西野昌克（有馬温泉路地裏アートプロジェクト）、田中圭一（堺市教育委員会指導主事）、河南誠（丹波篠山まちなみアートフェスティバル）、櫻井淳子（千早赤阪村野外美術展in棚田） ○コメンテーター：小吹隆文（美術ライター）、他 ○司会：井上雅人（社会学者・武庫川女子大学専任講師） ○オブザーバー：水野順之（文化・芸術による福武地域振興財団事務局） ○ホスト：藤井達矢（総合ディレクター）、北夙川不可止（舞台公演担当ディレクター）
27. 世界デザイン会議1960再考—WoDe Co 50周年をめぐって—	共	2010年07月17日	デザイン史学研究会 第8回シンポジウム	会 場：津田塾大学 AVセンター1階 榮久庵憲司（インダストリアルデザイナー） 柏木 博（武蔵野美術大学教授・デザイン評論家） 井上雅人（武庫川女子大学講師）井口壽乃（埼玉大学教授・デザイン史学研究会会長）
28. 洋裁文学と映画	単	2007年06月24日	MKCR第4回国際シンポジウム「東アジアにおける洋装化と洋裁文化の形成」	かつて戦後の社会において、洋裁を舞台とした文学と、それを原作とした映画が数多く作られた。というのも、当時の社会には、洋裁家、洋裁師、ドレスメーカーなどと呼ばれた「デザイナー」がどのような存在で、どのような生活をしてきたかについて、分かりやすく使いやすい共通のイメージがあったからである。それは、社会のなかで一人生きていく女性というイメージである。
29. ファッションと身体	共	2005年07月	日本経済評論社	ジョアン・エントウィスル著 協同翻訳
30. 関西ファッション史の形成にむけ	単	2004年07月2	武庫川女子大学中央キ	『関西におけるファッション（衣）文化の形成—裁

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
て		6日	キャンパス	縫習得及び衣服作りに関する事例発掘を通して-』の研究会
31. 「衣服文化と伝統の創造」	単	2004年02月	国立民族学博物館	国立民族学博物館共同研究『【13】モノに見る生活文化とその時代に関する研究-国立民族学博物館所蔵の大村しげコレクションを通して-』発表
32. 「無駄の効用 -揺らぎと遊び-」	共	2004年01月	国立研究開発法人 科学技術振興機構 異分野研究者交流フォーラム	コメンテーターおよび実行委員
6. 研究費の取得状況				
1. モノにみる現代日本の生活文化と歴史の発掘とその活用に関する研究	共	2012年度～2015年度	科学研究費 研究分野： 文化人類学・民俗学 研究種目： 基盤研究(C)	研究分担者
2. 最初期テレビCMの学際的研究-ネットワーク配信による研究・教育活用システムの構築	共	2009年度～2011年度	科学研究費 新学術領域研究(研究課題提案型研究費)	研究分担者
3. 現代日本のポピュラーカルチャーの相関分析による成立基盤の実証的研究	共	2009年度～2010年度	科学研究費 研究分野： 芸術学・芸術史・芸術一般 研究種目： 挑戦的萌芽研究	研究分担者
4. 暮らしにおけるモノと人との相互的関係に関する生活文化学的研究	共	2004年度～2006年度	科学研究費 研究分野： 文化人類学・民俗学 研究種目： 基盤研究(B)	研究分担者

学会及び社会における活動等

年月日	事項
	大正イマジュリイ学会 日本生活学会